

森村英典著



おはなしOR

日本規格協会 1983年 237頁 定価 1300円

世の中には「おはなし×××」といったたぐいの本がかず多く出版されていますが、なかには「羊頭を掲げて狗肉を売る」どころか、その実何も売らないといった本が決して少なくありません。その中であってこの本は「羊頭を掲げて松坂牛肉を売る」といった趣きがあり、題名に比べてその内容は実に充実した立派なものです。しかも題名の「おはなし」にそむかず、わかりやすくORの本質が書かれており、いたるところにダイヤモンドのような貴重な言葉がちりばめられています。この本を読んだ時、私はガモフ博士の「不思議の国のトムキンソン」を連想せずにはいられませんでした。ガモフ先生の本は約半世紀前に出版され、当時洛陽の紙価を高からしめたものでした。その内容は今となっては多少古典的ではありますが、難解な量子力学をカリカチュアライズして説明したのですが、その重要な本質は失っていません。それもガモフ先生がこの方面の碩学であったからでしょう。この本の著者はORの第一級の研究者であり、かつORの実施と普及に関して深い関心を抱いておられますが、それがこのようにみのりある成果を生んだ原因ではないかと推察されます。

以下順次その内容を見てゆきましょう。おはなしは動物園を中心に舞台まわしが行なわれます。大きな特色の1つとして、各章ごとにつけられたタイトルです。それはユニークでかつユーモラスに富んでおり、その章の内容を実によく表現しています。こんなところに読者が抵抗なく読みすすめてゆく秘密があるのでしょうか？

「ORことはじめ」ではORの歴史にはじまり、ORの基礎となるモデルやORワーカーの心がまえが平易な言葉で説かれています。これらはORのベテランと自称しているOR屋にとってはよき反省の材料となるのではないのでしょうか。第2章は「結果よければすべてよし」というタイトルで時系列の予測について書かれています。その中で予測の本質について懇切に説明されています。予測とはドンピシャリ当てることであると思っている人々にとってよい薬となると思います。

第3章は相関による予測として回帰直線の話が書かれており、この中で「曲がり直すグラフ用紙」の項でグ

ラフを書くことはそこから何らかの情報を引き出すためですから、できるかぎり、情報の引き出しやすいようにグラフ用紙を変えたり、目盛を変えたり、足してみたり引いてみたり、いろいろ試みることが必要であるという一節があります。これなどはデータより問題の本質を見ぬく大切な態度で、数式を云々するのはこの次の段階でしょう。章のタイトルに「ためつすがめつ」とつけられていますが、心憎い気の配りようですね。

以下、PERT、輸送問題、線型計画法、在庫管理、シミュレーション、待ち行列といったORの定石について書かれています。これらORの代表的手法に対して数式がほとんど出てきません。それでいて各石の本質が十分説明されています。数式嫌いな人々にとってもすなりとORの真髄に触れることができるでしょう。最後は「現場に根を下ろしたORを！」と「ORの効用と今後」で結ばれています。その中に「より人間らしい仕事」「仕事が増えます楽しくなる結果」といった表現がありますが、ORのような論理の世界を取り扱う人にとって基本的な態度でしょう。著者の暖かい人柄から出た心からの言葉であると思います。

通説してみると数式ぬきではあり、かつ言葉は平易ですが、決して俗におちることなく読者にORの真髄を知らせてくれています。なお挿絵も見えて楽しく、この本の内容にピッタリしており、読者の理解を深めるのに大いに役立っています。

この本は初心者、特に数式が苦手な人がORとは何かを知るのによき手がかりとなるとともに、OR屋にとって貴重な反省材料にもなるでしょう。欲をいえばこの本の中で経営者のORに対する心がまえについて書いてほしかったのですが、このような要求は著者に対してないものねだりかもしれません。

この本は机にむかって姿勢を正して読むもよし、こたつの中でみかんでも食べながら気楽に読んで、疲れたら顔に屋根をふくような読み方でもよいでしょう。食べてみなければ料理の美味はわかりません。と同様に、この本も読んでみなければ本当のよさはわからないのではないのでしょうか。
(原野秀永 文教大学)